

九州天皇家論 7章 吉野の宮

九州天皇家の都

吉野の歌

奈良・吉野の歌

万葉375番歌 湯原王、芳野にて作る歌一首

吉野なる 夏實の河の 河淀に 鴨鳴くなる 山陰にして

作歌者、湯原王は天智天皇の子、志貴皇子の子と伝えられている。歌人として有名である。この歌に「夏實の河」が歌われている。「夏實」とは現在名では「菜摘」である。奈良吉野、宮滝の上流の地名である。

奈良吉野を流れる河は現在名は吉野川であるが、八世紀のこの時代、吉野川と詠われておらず「夏實の河」と詠われている。

吉野の 夏實の河の 河床で 鴨の鳴く声が聞こえる 山の陰になった所で

(「日本古典文学大系・萬葉集・頭注375」)



奈良吉野宮滝付近

375番歌は奈良吉野の現地の状況に相応しい歌である。日本中、どこにでも見かけた山間の清流を普通に詠っている。これが奈良吉野の歌である。文武天皇も吉野を詠っている。

大行天皇、吉野の宮に幸し時の歌 74番歌

み吉野の 山の嵐の 寒けくに はたや今夜も わが独り寝む

右一首 或いは云はく、天皇の御製歌

この孤独感、この寂寥感はどうでしょう。吉野の宮があったとされる宮滝付近は、山が迫り、「山の嵐」にぴたり
の情景である。今訪れても寂しい。真っ暗な夜はなお寂しい。風の音とせせらぎの水音が聞こえるだけである。
もうひとつ奈良吉野の歌を考えてみよう。

暮春の月、芳野の離宮に幸し時、中納言大伴卿、勅を奉りて作る歌一首 315番歌

み吉野の 芳野の宮は 山柄し 貴かるらし 川柄し 清けかるらし 天地と 長く久しく

萬代に 変わらずあらむ 行幸の宮

反歌

昔見し象の小河を今見ればいよよ清けくなりけるかも

この吉野も奈良吉野の歌である。題詞にあるように奈良・吉野の宮は離宮であった。中納言大伴卿は「吉野の川」は「小河」と歌っている。「離宮」「小河」は奈良吉野の宮の位置と地勢に関する的確な表現である。

佐賀・吉野の歌

もうひとつ、吉野を詠った歌がある。

万葉集第三巻244番歌

三吉野の 御船の山に 立つ雲の 常にあらむと わが思はなくに

右一首、柿本朝臣人麿の歌集に出づ。

「人麿歌集に出づ」と注釈するので「人麿」の歌であろう。244番歌では「三吉野の御船の山」と歌う。原文は、「三吉野之 御船乃山に 立雲之 常将在跡 我思莫苦二」である。「三吉野」は「美吉野」の意であろうが元々は「三つの吉野」の意であろう。川が二つ流れている。その両側に三つの葦野が広がっていた。山の名前は「御船の山」である。つまりこの山は船の形をしている。

244番歌は吉野を詠っているが奈良・吉野ではない。さて、この吉野はどこか。すでに古田武彦氏の研究がある。

武雄市(佐賀県)には、一見忘れえぬ秀抜の名山、御船山があり、「竈峯(ともだけ)」「帆峯(ほだけ)」「舳峯(みよしだけ)」の三峯が相屹立している。「三船」の姿だ。

(古代史の十字路 万葉成立論 注(4))

武雄市の御船山の写真を下に掲げます。どうですか。この山を見て、船を思い浮かべますか。しかし、峯には「竈」「帆」「舳」と、船に関係する名前が付けられているので、この山を船に見立てている。「御船の山」と詠われた吉野の山とは武雄市御船山である。

人麿が詠った「三吉野の御船の山」とは、佐賀県武雄市の御船山である。この辺りは、かつて吉野と呼ばれていたであろう。そして、古代、ここに住んでいた人々はこの山を見て船を連想した。彼らは山の民ではなく、海の民だったのである。



人麿 吉野の歌

吉野の宮に幸しし時、柿本人麿の作る歌(万葉集巻1-36)

やすみしし わが大王の 聞し食(め)す 天の下に 国はしも 多(さは)にあれども 山川の
清き河内と 御心を 吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太敷(ふとし)きませば
百礪城(ももしき)の 大宮人は 船並めて 朝川渡り 船競ひ 夕川渡る この川の 絶ゆるこ
となく この山の いや高知しらす 水激(たぎ)つ 滝の都は 見れど飽かぬかも

反歌

見れど飽かぬ 吉野の川の 常滑の 絶ゆることなく またかえり見む

人麿が歌った吉野はどこか? 「河内」「吉野の国」「秋津」「船並めて」「朝川渡り」「滝の都」……これらの歌詞は奈良・吉野を遠ざける。

記紀の吉野

吉野は神武紀に早々と登場する。記紀に登場する吉野を抜き出して見よう。

神武紀・吉野は小倉南区

- (1) 神武一行が「熊野村」で迷った時、八咫鳥に導かれて降りていった所は、「吉野河の河尻」だったと伝える。その河とは小倉南区の竹馬川である。当時の河の名前は「吉野河」だった。その川の河口が「吉野」と呼ばれていたのは当然である。

- (2) 是の後に、天皇、吉野の地を 見たまはむと欲して、乃ち菟田の穿邑より、親ら輕兵を率いて、巡り幸す。

神武は「菟田」に駐屯中、輕兵を連れて「吉野」を見学に訪れている。この「吉野」も小倉南区の竹馬川河口の「吉野」である。「菟田」は小倉南区の長野にあった古代地名である。

- (3) 神武が、「蜻蛉の砥舐め」と表現したのは竹馬川の流れであった。また、「内木綿」と表現されたのも同じ「竹馬川」であった。神武が国見をして、「秋津島」と名づけたのは竹馬川流域であった。

応神紀・吉野宮は神武・吉野と同じ

十九年の冬十月の戊戌(つちのえいぬ)の朔(ついたち)に、吉野宮に幸(いでま)す。時に国樸人(くずひと)来朝(まうけ)り。因りて醴(こ)酒を以て、天皇に献りて、歌して曰(まう)さく、

櫃(かし)の生(ふ)に 横白(よこす)を作り 横白に釀(か)める大御酒 うまに 聞し
持ち食(を)せ まろが父

歌既に訖(をは)りて、即ち口を打ちて仰ぎて嗤ふ。今国樸人、土毛(くにつもの) 献る日に、歌訖(をは)りて即ち口を撃ち仰ぎ咲(わら)うは、蓋し上古(いぬしへ)の遺則(のり)なり。夫れ国樸は、其の為人(ひととなり)、甚だ淳朴(すなほ)なり。毎(つね)に山の果(このみ)を取って食ふ。亦蛙を煮て上味(よきあじわい)とす。名づけて毛瀾(もみ)と曰ふ。其の土は、京(みやこ)より東南、山を隔てて、吉野河の上に居り。峯嶮(たけさがしく)しく谷深くして、道路狭く巖(さが)し。故に、京に遠からずと雖も、本より朝来(もうく)ること希なり。然れども此より後、屢(しばしば)参赴て、土毛(くにつもの)を献る。其の土毛は、栗・菌(たけ)及び年魚(あゆ)の類なり。

応神が「吉野宮」を訪れた記事である。応神自身の宮は別のところにあった。

品陀和気命、輕島の明宮に坐しまして、天の下治らしめしき。(「古事記」)

応神の宮は「輕島の明宮」である。「輕島」とは地名であるが元々は島の名前だったのであろう。小倉南区・曾根は入り江が多く島も多くあった。応神の「輕島の明宮」は曾根の島にあったのではないか。曾根の「輕島」から船で竹馬川を渡り、「吉野の宮」に行った。日本文学大系・日本書紀・頭注15は次のように書く。

吉野宮は7・8世紀にしばしば利用された離宮。斉明2年(656)是歲条に「又作吉野宮」とある。奈良県吉野郡吉野町宮滝の辺かという。

「吉野宮を奈良・宮滝としている。斉明・吉野の宮と応神・吉野の宮は同一なのか。

斉明紀・吉野の宮は奈良・吉野

二年九月 又、吉野宮を作る

五年三月一日 天皇、吉野に幸して、豊宴す。三日に、天皇、近江の平浦に幸す。

斉明紀には「又、吉野宮を作る」と記録している。だがこの記事は不思議である。すでに「吉野宮」は応神紀に存在している。雄略紀にも存在記録がある。応神、雄略など九州天皇家の「吉野宮」はすでに存在していた。

斉明紀の「又、吉野宮を作る」というのは九州天皇家の「吉野宮」ではない。斉明はその2年(656)に吉野宮を作った。これは「吉野に新しく宮を作った」という意味である。斉明が新しく造った「吉野の宮」とは奈良・吉野の宮である。その宮は奈良吉野・宮滝辺りにあったと云われる宮である。奈良・吉野と特定できるのは次の記事である。

五年三月一日 天皇、吉野に幸して、豊宴す。三日に、天皇、近江の平浦に幸す。

3月1日に「吉野」に行き、3日に「近江・平浦」が続く。この「近江・平浦」とは滋賀県・比良であろう。

斉明が656年、初めて造った「吉野の宮」とは奈良・吉野の離宮である。応神・吉野の宮は九州天皇家の吉野宮である。この二つの宮は別々の宮である。

雄略記・吉野の宮は小倉南区

天皇、吉野の宮に幸行でましし時、吉野川の浜に童女有りき。其の形姿美麗しかりき。故、是の童女と婚ひして、宮に環り座しき。後更に亦吉野に幸行でましし時、其の童女の遇ひし所に留まりまして、其処に大御胡座を立てて、其の御胡座に座して、御琴を弾きて、其の嬢子の舞為しめたまひき。爾に其の嬢子の好く舞へるに因して、御歌を作りたまひき。其の歌に曰ひしく、

胡座座の 神の御手もち 弾く琴に 舞する女 常世にもがな
といひき。即ち阿岐豆野に幸でまして御狩したまひし時、天皇御胡座に座しましき。爾に虻御腕を喰ふ。即ち、蜻蛉来て其の虻を食ひて飛びき。是に御歌を作みたまひき。其の歌に曰ひしく、

み吉野の おむろが嶽に 猪鹿伏すと 誰ぞ 大前に奏す やすみしし 我が大君
猪鹿待つと 胡座に座し 白妙の 衣手著具ふ 手むらに 虻かきつき その虻を
蜻蛉早食ひ かくの如 名に負はむと そらみつ 倭の国を 蜻蛉島とふ
といひき。故、其の時より其の野を号して阿岐豆野と謂ふ。 (古事記・下巻・吉野)

地名説話である。神武が竹馬川を「蜻蛉の砥舐め」と表現して以来、小倉南区は「蜻蛉島(秋津島)」と云われてきた。この故事を前提に雄略はこの歌を作っている。神武が国見をしたのは竹馬川の流域で、「蜻蛉島(秋津島)」と呼んだのである。その同じ國で雄略は狩りをした。手を虻が噛んで、その虻を蜻蛉が咥えて飛んでいった。その出来事を詠った。神武が「蜻蛉島」と云い、雄略が「蜻蛉島」と云ったのは同一場所である。同じ王朝内で「トンボの島」という特異な名前が付けられた場所は同じである。神武も雄略も小倉南区の竹馬川を「蜻蛉島」と詠んだ。神武の吉野、雄略の吉野はどちらも小倉南区である。

